

二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版

# 武闘巫女伝 サツキ

小説 小湊拓也

挿絵 柴刃俊郎

一	カゲツチの章
二	ツクヨミの章
三	タケミカヅチの章
四	アマテラスの章

## 登場人物紹介

Characters



ふじわら きつ き  
**藤原 沙津姫**

御崎新党より新多摩川学園に派遣された戦巫女。武神器、斬魔刀・景光を操る、ポニーテールの少女。

りゅうざき かぐら  
**竜崎 神楽**

沙津姫に先行して学園に潜入していた長身の戦巫女。武神器は小鴉という刀。

み ふね あゆ こ  
**御船 鮎子**

沙津姫のクラスメイト。学園の先輩である神楽を慕う少女。

りゅうぞうじ もえ み  
**龍造寺 萌美**

沙津姫の同級生。ぼんやりとした外見に妖しい魅力を秘めた少女。

かどわき しん や  
**門脇 信也**

十代とは思えないがっしりした体躯の少年。沙津姫のクラスメイト。

「くうッ……」

端正に並んだ歯を食いしばる神楽。野性的な美貌に恥辱の赤みが差し、均整のとれた長身が弓なりにのけ反った。ブレザーの前ボタンはいつの間にかすべて外れており、濡れて下着の線がくつきりと浮かんだブラウスの胸がぐっと突き出される。そこにアマーバ状の汚れが群がり、開いた胸元から這い入ろうとする。

「タッ……ケミカツチっ！」

どうにか神楽は叫んだ。一瞬の放電で、絡みついていたものがすべて少女の身体から離れた。腐ったものをレンジかなにかで加熱したような臭いが漂う。が、本当に一瞬だった。新たな激みの荒波がすぐに押し寄せ、神楽を包む。

溺れたような呻きが漏れる。汚水の塊が少女の口に押し入っていた。すでに水と呼べるものではない。形容し難い不味さとともに、ナメクジを思わせるおぞましい質感が口内で動き回っている。

「ぐむっ……ぶはっ！ こっ、このおおおっ！」

無理矢理それを吐き出し、怒声を放つ神楽。執拗に巻きついてくる肉鞭の一つを両手で掴み、

「なめるなああっ！」

左右に引きちぎる。ゴムの弾けるような音とともに、体液らしい暗緑色が飛び散った。



アメーバと軟体動物の中間のようなものに変わりつつある濃みを激しく蹴りつけ、どうにか体勢を安定させようとしながら神楽は聞いた。笑い声が聞こえたのだ。

「無駄ですよ……」

聞き違えるはずのない少女の声。もはや肉質の汚物溜まりとなったプールの一部が盛り上がっていた。その隆起が泡の如く弾け飛び散る。

卵から生まれたかのように中から、萌美の変わらぬ異形が現れた。潰された眼球も股間も再生し、刎ねられた首も綺麗に繋がっている。屍聖も右手に握っている。ただ頭には小鴉が突き刺さったままだ。

「ホントに、死ぬかと思いましたよお」

相変わらずの口調で言いながら、少女はそれを無造作に左手で引き抜き捨てた。へアピンかなにかを抜いて捨てる、そんなふうだ。小鴉が、プールを満たす汚肉の中にずぶずぶと沈んでいく。神楽が手を伸ばして届く距離ではない。

「これ凄いでしょ。竜崎先輩と藤原さんに死ぬほど悦んでもらおうと思ってえ、わざわざ仕掛けたんですよ？」

屍聖でプール全体を指しながら、萌美は訊かれてもいないことを自慢げに語り始めた。

「門脇君の因子の全部……男の子っていう生き物の遺伝子の中にある、とにかくオンナ犯りてええええっ！ って要素をねえ、ツクヨミの秘術で絞り出してプールにぶちまけてみ

たら、こんなになっちゃってえ」

少女の言葉に、笑い声が重なっていた。

ククッ……クククククク……。

ヒヒヒヒヒヒヒヒ、ヒヒ……。

グエッ……ゲッゲゲゲゲゲ。

人間というより、進化の過程でようやく笑うことを覚えた猿人か原人が発している声。

そんな笑いが複数、多数、神楽を取り巻いている。

プールが、笑っていた。二十五メートルの長方形を満たす汚肉の表面に無数の、人間の口ほどの裂け目が生じている。猿を思わせる笑い声は、それらが発していた。

「グヘッ、ゲヘヘ……オ、オオ」

言葉らしきものを漏らし始めた口の一つ、その周囲が楕円形に盛り上がる。かっと目蓋が開き、血走った二つの眼球が現れた。ドロリとした肉の汚物で構成された人面だった。

「オオ……オ、オンナ……」

皮を剥がされたようなそれがニタリと歪み、なおも隆起して神楽の顔を覗き込む。だらしなく緩んだ口から長い舌が伸び、少女の胸元に這い寄った。

生まれたばかりの人面が突然潰れ、汚肉を飛び散らせた。神楽の右肘が、肉鞭を振りきって叩き込まれていた。骨を砕く感触はなかった。肉だけの醜悪な容貌、それがプールに

満ちている。

長身の少女のぬめりを帯びた太腿に、透けて見えるブラジャーの膨らみに、長い髪の貼りついた首筋に、それらの視線が粘つくように集中している。濡れたショーツに向かってぐいっと盛り上がってきた肉顔の一つに左膝を喰らわせながら、神楽はどうにか中腰になった。水ではない。不安定ながら足場はあるということだ。

「こんな悪趣味なもの造り出すのがツクヨミの術か」

「そりゃあ見た目はアレだけどお、でもすぐ気に入ってくれると思いますよ？　つてゆうかコレなしじゃいられなくなつて、もおスゴイことになつちやいますよお？」

萌美が嬉しそうに言いながら、大仰な仕種で屍聖を向けてくる。骸骨の顎が開いた。すでに灼熱の赤色光が溢れ始めている。

「だからおとなしくしましよ、カグツチい」

それが球形となり吐き出される。踏ん張りのきかぬ肉の足場の上では跳躍もままならず、神楽は横に倒れ込んでかわすしかなかった。

「くっ！」

倒れた身体を、汚肉の群れが受け止める。ミミズ、あるいはナメクジのような形に一斉に隆起し、神楽の脚に、透けた制服に、群がっていく。ブラウスに潜り込もうとするそのぬめりの塊を引きちぎろうとする少女の右腕に、四本もの肉鞭が絡みついた。

ブラウスのボタンが弾け飛ぶ。たわわに実った双丘を包む白いブラジャーが、揺れながら露わになった。

人面たちの笑いが一層、下卑た響きを帯びる。睨みつける神楽の眼光に、数十もの貪欲な視線が返された。

鮎子は罵ってはくれなかった。なにを言ったらいいか考えている様子だ。沙津姫の方から言葉が発することもない。一分にも満たぬ沈黙が彼女の細い肩に重く覆い被さっている。ずしりと押しつけられるように、沙津姫はベッド脇の椅子の上で細身を縮めていた。

「藤原さん、あの……」

鮎子から会話を始めた。

「ひょっとして、自分のせいだ……とか思ってます？ 藤原さんにああ言われて、あたしがヤケ起こして、とか」

沙津姫はなにも言わない。どのような辛辣な責め言葉にも耐えられるよう、身も心も固くしているところだ。ぎゅっと握った拳を膝の上に置き俯きながら、ちらりと鮎子を見る。

上目遣いのその視線を、辛辣さのかけらもない笑顔が受け止めていた。

「藤原さんは、なんにも間違ったこと言ってます。あたしが、やらなきゃいけないことやっただけです」

「……あんな目に遭うのが、やらなきゃいけないことだって言うの」

沙津姫もようやく声を出した。

「あたしには、戦巫女の人たちみたいにかっこよく戦うことなんてできないから、ああするしかないんです」

鮎子がベッドの上で身を起こす。沙津姫は顔を上げた。

「御船さん、どこへ……」

「神楽先輩を助けに行かなきゃ。戦ってるんでしょ？ 先輩」

少女の丸顔から笑みが消えた。真摯な光が大きな瞳に宿る。

「わかってます。あたしにできることなんて、あるわけじゃないですよ。でもその、藤原さんのことはなんとか助けられたみたいだし、おんなじように神楽先輩も」

「あなたは」

沙津姫は遮った。

「御船さん、あなたはもう戦ったわ。あたしなんかより、ずっとね」

言いながら手刀を振り下ろしていた。鮎子の首筋を軽く打つ。ぐったりと力を失った少女の身体を再びベッドに横たえ、そっと毛布をかけてやる。気を失った安らかな顔を、少しだけ見つめた。

非力な、戦う術も持たない少女が戦ったのだ。か弱い身体を犠牲にして。戦巫女である

自分が、打ちひしがれている場合ではなかった。

保健室を出ながら一度、自分の頬を平手で叩く。そして沙津姫は咬いた。

「戦わなきゃいけないのは……あたし」

肉鞭の一本にむしり取られたブラジャーが宙を舞った。ぶるんっ、と突き出された裸の乳房に、波打つ汚肉がヒルのように群がっていく。はちきれそうなその白さに、汚らしいぬめりを帯びたドス黒さが貼りつき這いずった。

「うくっ……」

おぞましさに身を反らせる神楽。突き上げられる格好となった乳房を、軟体動物のような肉塊が執拗に這い上る。たっぷりとした丸みと若々しい張りを、幾枚もの黒い舌が舐め回しているようにも見える。

抵抗しようとする両腕には左右計十本近い肉鞭が巻きついていて、両脚も同様で、その拘束を引きちぎろうと激しく暴れる太腿にはドス黒いぬめりがびっしりと付着している。

「オ……ンナ、フへへへへへへへへ」

「オンナ……チチ……モモ……ヒヒッ、ヒヒヒヒヒヒヒ」

「ピチピチ……シテヤガルウ……」

人面たちがたどたどしい言葉を漏らした。動きを封じられながらも抗う活力を失わない

少女の半裸身の悶えようを、脂ぎった眼球で観賞しながら。

「……ぶっ潰してやるッ！」

あらゆる方向からの視姦に対し、神楽は睨み返すしかない。そんな気丈さを楽しむように、ヌルリとした嫌悪感が胸の双丘全体を這った。

ナメクジの感触が、やがて乳房の頂点に達した。

「あうっ！」

しなやかな半裸の長身が、感電したように反り震える。によりつと伸びた汚肉の先端が少女の乳首を觸り始めた。薄茶色の可憐な乳頭に、くりくりとぬめり気を擦りつける。

「うくっ……あッ、ああうっ！ ……畜生っ……」

両方の乳首を苛む執拗な不快感に、神楽は怒声と悲鳴の入り混じった声を発していた。

牝豹を思わせる脚線が、うねうねとした肉の蠢きの中で自由のきかぬ暴れようを見せている。獰猛なほどの色香を発散させている太腿をヌメヌメと撫で觸る汚肉、その一部がずるりとスカートの中へ忍び込んだ。

「やめっ……やめろおーッ！」

内腿を辱める肉のぬめりが、股間へと這いずっていく。その感触に、神楽の身体は拒絶の痙攣を見せた。

白いショーツは汚水に濡れて透け、ぶくつと盛り上がった陰唇の割れ目がはしたないほ

どはつきりと浮き出ている。ナメクジの形をした汚肉が、ゆつくりとそこに触れた。

「いやっ……くうッ！」

悲鳴を嘯み殺す神楽。シヨーツの膨らみにじつくりと小さな円を描き込まれる嫌悪感に、唇を噛んで耐える。

「テ……コズラセ、ヤガッテエ……」

人面たちの呼吸が荒い。

「ガキダト、オモッテタケドヨオ……クッへへへ……」

「感ジテル、感ジテヤガルゼ、ヒクヒクッテヨオ」

などと笑うそれらと対照的に、萌美は黙り込んでいた。先ほどまでの軽口をピタリと止め、汚肉の這いずりに凌辱される神楽の姿を観察するように見入っている。

少女の割れ目を、濡れた下着もろともこね回す醜肉。下等な軟体動物がシヨーツに貼りつき蠢いているような気持ち悪さが、神楽の股間を白い布地越しに辱めた。

「ウッ……くうっ！ いやっ……い、いい加減にいいっ！」

少女の身体が、追いつめられた牝獣の力を振り絞った。突然、肉鞭たちを振りほどいた右腕が、左腕を縛るそれらを引きちぎりにかかる。人面たちが狼狽している間に、神楽の両腕が自由になった。

ヒルのように乳房に吸いつく滑肉をちぎり捨てながら、彼女は半裸の上体を起こした。

「いい加減にしろこの生ゴミがああッッ！」

頭上で両拳を握り合わせ、ハンマーのように振り下ろす。タケミカヅチ。その叫びが神楽の唇から放たれていた。

肉のプールに叩き込まれた両拳から、電光が拡がった。人面の幾つかが悲鳴をあげる。

ほう。そんな感じに萌美の唇が動くのが見えた。感心した様子を見せながらも異形の少女は、足元の肉原に屍聖を軽く触れさせていた。再び唇を動かす。ツクヨミ。そう動いた。

電撃に怯んでいた汚肉の蠢動しゅんどうが、薬物を打たれたかのように活性化した。力なくほどかれていた肉鞭の群れが、あつという間に神楽の両腕を絡め取り縛る。上体だけ起こして汚肉の上に座り込んだ姿勢で、神楽は再び動きを封じられていた。

「ヤッテ、クレタナァ……」

人面の一つが呻く。それに応ずるようなぬめりの蠢きを、神楽はショーツ越しに感じた。両脚に群がる肉の束縛も力を強めている。立ち上がることもできず、神楽は股間にびつたりとくっついて脈動する醜肉の感触から逃げられずにいた。

「くっ………ッッ！」

拡がったスカートの中で、その這いずりがショーツの股間の布地を押しつける。敏感な部分が剥き出しになったのがわかった。

神楽の呼吸が一瞬、詰まった。おぞましいほど滑らかに、汚肉の盛り上がりが入り込んで

きたのだ。

「あぐッ！」

軟体動物そのもののうねりが膣内にある。それがゆっくりと動き始めていた。少しずつ少しずつ、強烈な違和感が下腹部に拡がっていく。

「くっ……うぐっ……」

見開かれた瞳に、うっすらと涙が浮かんだ。

犯された。その実感が体内の汚肉の蠕動ぜんどうとともに増していく。

肉鞭が二本、眼前に浮かんだ。いやらしく鎌首をもたげた先端が、ざわざわと変化を始める。糸ミミズのような幾本もの細く小さな触手、それが生えていた。

うねうねと暴れる触手の塊が二つ、焦らすように神楽に近寄ってくる。

「来るなっ……」

ドロドロに濡れた髪を揺らし、少女は首を振った。がっちりとした幾重にも縛られた両腕を、虚しく震わせる。

先端に糸ミミズを生やした二本の肉鞭、それらが神楽の裸の胸に忍び寄る。

「アッ……！」

乳首に触れた。ツン、と木の実のように突き出た薄茶色の乳頭を、糸ミミズの群れがざわざわとくすぐり始める。グレイプフルーツのような両の乳房が、凌辱から逃れるように

ブルツと暴れた。

「あう……くふっ、ううッ……！」

ニヨロニヨロと乳首を苛める触手たちの動きと連動するように、神楽の股間では汚肉の蠢動が活性化しつつあった。歪んだ喜びの呻きが、あちこちから発せられている。

「グフ……イ、イイ締マリダ……」

「鍛エテアリヤガル。多少ハ荒ッポクシテモ壊レソウニネエ」

ぐちゅ、グチュッ、と音をたてて体内を這う蠢きを、神楽はぎゅうっと締めつけた。強靱な下腹部の筋力で膣を圧迫する。引きちぎってやる。そう念じた。

「オオオオ……タタ、タマンネネエ！」

途端、身体の中でそれが痙攣した。

「これ、は……ああうッ！」

軟体動物のようだった肉塊が、下腹部の中で固さを増す……というより勃起していた。茸の傘のように、先端がポコッと変化した感触が膣内にある。

まともな男性器の形になった勃起体が、なおも膨れ上がった。そしてゆっくり、次第に激しく、少女の膣壁を擦り始める。

「あうッく……あつ、あうッ……！」

スカートの中で神楽を犯す肉の振動。それが少女の全身を突き上げている。まとめて開



かれたブレザーとブラウスが肘の辺りまでずり落ち、しっかりと鍛えられた肩の丸みとはちきれそうな乳房の膨らみが上下に悶えた。上向きに突き出された乳首をくすぐる糸ミミズの蠢きが、しつこさを増す。

「ううっ……あぐウッ！ うあああっ……」

制服をまとわりつかせた少女の長身が、獐猛な突き上げに激しく揺れている。長い髪が悩ましげに乱れ、無様な悲鳴を漏らすまいとする唇からはそれでも苦悶の声が溢れ続けた。恥辱に潤んだ瞳はしかし、気の強い輝きを失っていない。

スカートの内側で神楽に突き刺さった汚肉の男根が、なおも膨張した。ぐちゅうつ、と粘液の音を発して少女を犯す上下運動を、激しくしていく。力強い締めつけを堪能するように、それは神楽の体内で暴れ出した。

「ウッ、ああああっ！ こっ、このおおッ！」

子宮を粉碎しかねない勢いで、汚辱の肉塊が少女の強靱な下半身を犯し続ける。下腹部いっぱいには拡がったおぞましさに、神楽はなおも締めつけを加えた。

こうなれば、絶頂に導いてしまうしかなかった。射精の後の脱力状態、それが狙いだ。ほんの一次的にせよ肉の拘束も緩むだろう。反撃の機会は、もはやそこにしかない。

神楽は、自ら腰を動かし始めた。自分を凌辱している醜肉の塊を、下腹部全体を使ってしごき上げる。人面の幾つかが奇声を発した。



「極上ダ……フへへへへ」

脇の下に押しつけられていた人面が、匂いを吸いながら胸の方へと動いてきた。体操着の愛らしい膨らみをじつくりと揉みながら、その浅い谷間に鼻を擦りつける。微かな汗の香りを含んだ少女のかぐわしさを、醜悪な肉顔が犬のように貪っている。

「やめてっ……やめなさいっ！」

沙津姫は命令口調をどうにか保った。睨みつける瞳からはしかし、大粒の涙がこぼれ始めている。

「汚らしいっ……嫌ッ！ いやあっ……！」

辱められつつある処女の身体が、肉の束縛の中でなおも抗いを見せている。神楽のように強引に振りきるような腕力こそないものの、若々しい活力はいささかも劣らない。初々しく暴れる沙津姫の細身に、人面と手がさらに執拗に群がっていった。

尻の辺りに、妙な息遣いがあった。肉顔の一つが、触れるか触れぬかといった辺りで鼻をヒクヒクとさせている。

手が伸び、ブルマに触れてきた。

「あっ……！」

ぞわり、と不快感が腰を覆う。ビクッと嫌悪に震える小振りな尻を、ねっとりとなぞる掌と指。引き締まったブルマの膨らみを撫で、少女の柔らかな丸みを楽しんでる。

「や、やめなさいっ……いやあっ！」

「オンナノ、ニオイ……グフッ、フヘヘ」

蠢く団子鼻が、尻に触れた。

「あ……ああっ……」

沙津姫の声が、赤く染まり涙に濡れた表情が、ひきつった。ぴちつとした濃紺の布地の上から、匂いを貪る蠢きが伝わってくる。

自分は今、なにをされようとしているのか……沙津姫の心の内に、生まれて初めて恐怖感が芽生えた瞬間だった。これまでの戦いで、恐れ怯えを感じたことなど一度もない。

（あたし……汚される……）

開かれた瞳が張りつめ、震えている。

胸から、太腿や尻から、凶暴なほどの悪寒が身体じゅうに拡がっていく。柔軟な細身が限界まで弓形に反り、ぐっと突き出された小振りな胸がさらに揉まれ、香りを吸われた。

ブルマの尻には鼻だけではなく、分厚い唇まで触れてきた。

醜悪な肉顔の下半分が、柔らかな濃紺の布の上で息苦しそうに暴れている。丸く愛らしく引き締まった少女の尻を貪り辱めつつ、甘酸っぱく匂うフェロモンをしゃぶっている。

「嫌ッ、いやあっ……くっ！」

沙津姫は小さく整った歯を必死に噛み締めた。振り乱されるポニーテールとともに涙が

左右に散る。

「やめなさいっ！　くうっ……こ、このっ……や、やめないとオ……」

「ククク、ヤメナイト？」

面白がるように、人面の一つが覆い被さってくる。沙津姫は睨み、声を放った。

「かっ、カグツっ」

チの発音が終わる前に、口を塞がれた。唇を奪われていた。初めてのキス、その実感とともに沙津姫の身体が硬直していく。

口の形に開いた肉の裂け目に、桜色の可憐な唇は完全に吸い込まれていた。人面の下半分がもごもごといやらしく震えながら、沙津姫のファーストキスを貪っている。初物の唇が、虫のように蠢く大口の中で存分に味見をされた。少女の意識が遠くなりかけた。

とめどなくぬめり気を分泌する不快感の塊が、やがて歯を押し開いて侵入してきた。舌だった。大量の腐肉を突っ込まれたかのように、少女の狭い口内が圧迫される。

噛みついてやる、そう決心しかけた沙津姫だったが、口が動かなかった。舌が、歯が、麻酔をかけられたように痺れている。

(汚される……汚されてる、あたし……嫌っ、絶対……)

そんな考えだけが少女の頭の中で鳴り響いている。

戦いに敗れ犯される、などとは考えたこともなかった。戦巫女として覚悟が足りない



はいえるかもしれない。そして覚悟を決める余裕など今はなかった。

硬直していた少女の身体を、さらなる悪寒が走り抜ける。ブルマの芳香を吸っていた人面が、舌を伸ばしていた。濃紺の布地の上から、きゅつと締まった少女の尻に唾液を塗りたくり始める。麻痺しかけていた感覚が一気に蘇り、衝撃と呼べるほどの気持ち悪さが敏感な細身を駆け巡った。凄まじいほどの拒絶反応が、凌辱に抗う活力を復活させる。

「……………っ！ 嫌あッッ！」

引きちぎるように激しく顔をそむけ、汚肉のキスを振りほどく沙津姫。大量に流し込まれた唾液が幾筋も糸を引く。

「嫌っ、こんなの絶対イヤあああ！ やめてっ、やめるこのっ！」

「イイ声……………出スジャネエカア……………」

尻にしゃぶりついた顔形の隆起が相変わらず匂いを楽しみながら、丹念に執拗に舌を踊らせている。沙津姫の小さな腰をしつかりと押さえ、突き出されたブルマの膨らみをびちゃびちゃと舐め回しているのだ。気が狂いそうなその感触が、少しずつ尻から股間へと広がっていった。

布越しの凌辱から逃れようと、細い身体が激しく跳ねる。長い舌が、尻の膨らみから股間にかけてベツトリと貼りついた。そして這った。

息が詰まりそうなほどのおぞましさが少女の股間で蠢いている。誰にも触れられたこと

のない部分が、舐められていた。ブルマを突き破りかねない激しきで舌先が暴れている。

「あうッ……く……く……っ！ い……い加減に……しなさいよ……ね……ッッ！」

気丈な言葉に、カチカチと歯のぶつかり合う音が混ざった。濃紺の布地の上から処女の部分を辱めている舌の感触、それに沙津姫は辛うじて耐えた。溶けそうなほど唾液で濡れたブルマが、びつちりとショーツの線を浮かべている。

人面の口が器用に動き、ブルマの股間の部分を横に押しつけた。少しだけ膨らんだショーツの白さが露わになる。

「ソ……コ、コノ匂イ、イヨイヨ間違イネエカア……」

息荒く歪む人面が、下着の上から少女の味と香りを楽しみ始めた。団子鼻が、厚い唇が、舌が、未知の違和感と不快感をショーツ越しに擦りつけてくる。

沙津姫の処女を、味見していた。

「くあッ！ ……ああッ、やっ……やめッ……！ あうッ、クッ！」

苦悶の声を漏らしている間にも少女は裸にされつつあった。執拗に胸を揉んでいた手が、脇の下まで体操着をたくし上げる。じたばたと暴れても揺れない胸を覆う、ブラジャーの清潔な白色。そこから伸びる優美な脇腹の曲線。瑞々しい下着と肌の白さに、粘着質の眼差しが全方向から集中した。手が、舌が間髪入れず殺到する。裸の脇腹を舐められた。

電流のような嫌悪感に、沙津姫の半裸身がビクッと躍る。その反応を、男を知らぬ肌の

滑らかさと若々しい張りを、ドス黒い舌がネロネロと味わっている。

健康的なボディラインを貪る肉質のぬめり気が、へその周囲にまで及んだ。柔らかく引き締まった少女の脇腹に、ぞわっ、ぞわわっ、ぞわわっ、と拒絶の震えが走った。じつくりと味わう動きで、腐肉のような舌が弛みない処女の美肌を這い回る。

「嫌……やめてよっ……」

勇敢な戦巫女の表情の下から、男を知らぬ少女本来の怯えが現れかけている。

「大人ニシテヤロウツテンダヨ、ガキガヨオ……チ、チッチエ胸シヤガッテ」

小振りな形に膨らんだ白いブラジャーを黒い手でもぞもぞと覆い、揉んだ。指と掌の形をした汚肉の塊が、下着もろとも少女の胸をむにと弄ぶ。

「こッ……殺すわよこのっ……うあうッ！」

長いポニーテールを悲痛に振り乱し、それでも処女の怯えを必死に隠そうとする沙津姫。暴れる上半身にまどわりつく両手が、胸を揉みしだく握力をぐっと強めた。そしてブラジャーを引きちぎる。暴かれた白い膨らみが少しだけ揺れた。

すらりとした身体の均整を崩さない、小さな胸だ。だが平らではなく、こうして目一杯のけ反った姿勢でも小さめながらしっかりと整った丸みを保っている。その頂点でツンと可愛く上を向いた小さな突起は、唇と同じ可憐な桜色だ。乳輪はないに等しい。

「オ……オオ、可愛イオッパイダア……コレナラ、無理ニ大人ニナルコトモネエナア」



この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**